文部科学省 IB 教育推進コンソーシアム
IB 教育アドバイザー　好事例共有シリーズ　vol.4

２０２５年８月２１日
高知県香美市立大宮小学校
岡本　さちよ

自己調整しながら、概念的理解を深める学習者の育成

本年度より、本校と香北中学校は、上記にある「自己調整しながら、概念的理解を深める学習者の育成」を共通の研究主題として研究を始めた。11 月 12 日（水）に、全学級が授業公開を行う研究会を控えているため、６月には全学級が研究授業を行った。以下は、第２学年岡本学級における研究授業の振り返りである。

１．単元について

セントラルアイディア	How the world works　「私たちは自然の恩恵と脅威の中で生きている」
目指す 10 の学習者像	探究する人　　信念をもつ人　　振り返りができる人
Unit を通して身に付けさせたい ATL スキル	リサーチスキル（情報リテラシー）　思考スキル（批判的思考）　自己管理スキル（管理・調整）
探究の流れ （16／全 24 時間）	①自然の恩恵と脅威の探究「特徴」 ②体感，実感する自然の恩恵と脅威の探究「視点」 ③自然を生かした生活の探究「関連」
関連教科	「植物の発芽や成長」（教育出版『未来をひらく小学理科５』） 「観察したことを書こう」（東京書籍『新しい国語二　上』） 「働く人に話を聞こう」（東京書籍『新しい国語二　上』） 「長さをはかってあらわそう」（東京書籍『新しい算数２　上』）

２．本時について（16／24 時間）

⑴　**本時の目標**　　自分達にとっての自然の恩恵と脅威は何かを考えることができる。

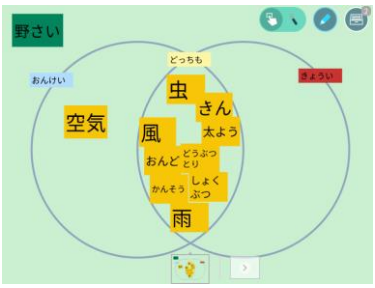
⑵　**本時で身に付けさせたい主な ATL スキル**

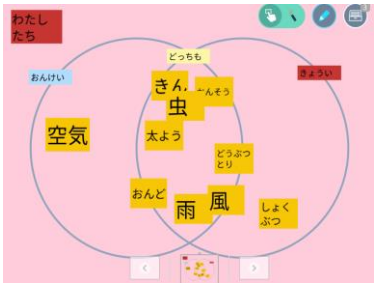
ATL スキル	思考スキル（批判的思考）	思考スキル（振り返りとメタ認知）
目指す児童の姿	野菜にとっての自然の恩恵と脅威とを比べながら，自分達にとっての恩恵と脅威は何かを考え，理由を伝えている。	今日の学びから，これから自分がどのように自然の中で生きていくとよいかを考えて，マッピングに表している。

３．授業を振り返って

⑴効果的な ICT 活用や思考ツール活用

①ベン図で表す





これまで、栽培活動を通して、野菜にとってそれぞれの自然が恩恵なのか、脅威なのか体感してきた。そのため、児童は、野菜（左）については、ベン図にすぐにカードを置くことができた。

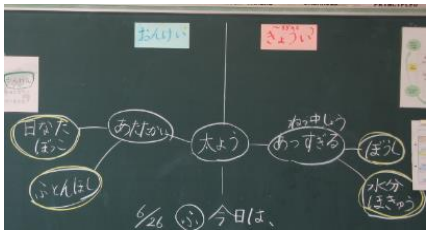
この活動後、人間（右）にとってそれぞれの自然が、恩恵か脅威かを考えた。その際、野菜（左）での学びをもとにして、考えていた。

２つのベン図を用いたことで，どの子もが「比べる」という批判的思考スキルを働かせて，自分の考えを表すことができた。

②友達と話して自分の考えを形成し、全体で共有する

自分の考えたベン図について，理由を伝えたり，友達と自分のベン図の違う所を探したりした。その中で、「恩恵と脅威の両方だけど、どちらかというと恩恵寄りかな」と、カードを置く位置へのこだわりをもって、説明をする児童もいた。１人で考える時よりも、より自分の考えを確かなものにすることができた。また、友達の理由を聞いて、「そうか、やっぱり私も変えよう」と自分の考えを変える児童もおり、それは対話をしながら思考している姿であった。ベン図をロイロノートで担任に送り、全員分を見合った。すると，児童は、自然カードがベン図の中央に集まっているという共通点に気付き始めた。友達のページの時に、自然カードが恩恵と脅威の真ん中に置かれていなかったら、「（植物）雑草は脅威になるけど、野菜は私達の食べ物になってくれるから恩恵にもなるよ」と、恩恵と脅威の両方になる理由を発言していた。

このようにして、野菜にとっても、人間にとっても、自然が恩恵にも脅威にもなることが、理解できるようになった。



⑵児童が自己調整するための手立てとその姿

①行い方を共有する

マッピングを用いて、以下の２点を思考することが、本時の中心的な活動である。児童が自分でできるように、行い方を丁寧に説明した。

❶その自然は人間にとってどんなところが恩恵・脅威なのか

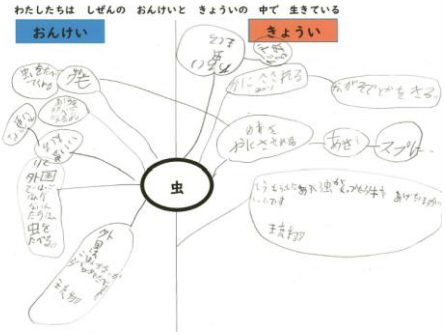
❷人間はそれをどのように利用・対策しているのか

しかし、２つ同時に思考させてしまったので、結果、❶のみを思考するだけになってしまい、❷を考えることができない児童もいた。児童の思考の流れとしては、❶の次に❷、と分けて行うべきだった。

②たくさんある「自然」の中から自分で選んで、書く

野菜にとって恩恵にも脅威にもなる自然（動物・鳥、風、乾燥、気温、雨、虫、太陽、菌、空気）をピックアップし、右のような用紙を準備した。自分が考えられそうな自然の中から選択できるようにし、自然と人間の関連について、自分の経験の中から思考することができた。

③友達が書いたものを読む



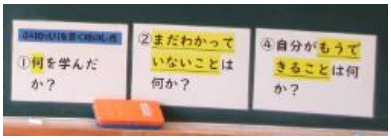
活動を始めると、児童は友達が書いたものをじっくりと読み始めた。他者参照することで、児童は新しいアイデアが浮かんだり、友達と似たような経験を思い出したりしていた。まさに，自己調整している姿であった。

④友達・担任と対話

友達と一緒に書きながら、「これはどういうこと？」「鳥の卵は食べられるから鳥は恩恵でもあるんだね」と対話するようになった。そうすることで、児童の理解は進んでいき、さらに、協働的に学ぶよさも実感するため、Agency が働き、活発に動き始めた。また、教師が「この脅威にはどんな対策をしているの？」と投げかけ、自己調整しながら児童の概念的理解を目指した。

⑤振り返りを書く

振り返りの視点を３つ（右）提示し、それを児童が選択して振り返った。振り返りの中で、児童は自分の理解度を認知したり、協働的に学ぶよさを実感したり、次にしたいことを書いたりした。（以下、振り返り）

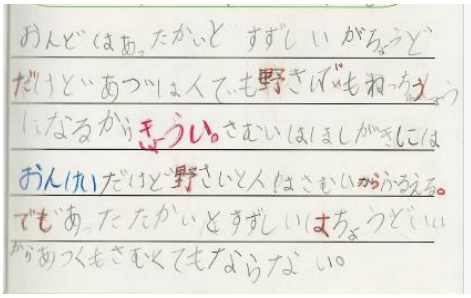


「友達が書いたものを読んでいくと、だんだんどんなことが人にとって恩恵・脅威かが分かっていった。」

「恩恵も脅威も同じくらいあって、びっくりした。」

⑶児童が概念的理解に迫るための手立てとその姿

①前時と本時をつなぐ授業初めの振り返り



授業はじめに、すでに概念的理解が進んでいる児童の前時の振り返り（右）を紹介した。これは、前時での学びを本時につなぐためと、本時に見通しを持って概念的理解に向かうために行った。

②自然と人間との関わり方を生み出す活動

児童が自分の実生活の中から、自然の恩恵と脅威を自分で見つけたり、つなげたりする活動が、児童の概念的理解を促すものとなった。これをきっかけに、本時以降には概念的理解がより深まっていった。

③振り返りから児童の概念的理解を見取る

振り返りを書く中で、児童は、自分と自然との関連について、ぼんやりしていたものが、思考が深まっていき、概念的理解へつながった。（以下、児童の振り返り：🔴概念的理解の深まり、🔵理解度は途中段階）

🔵「悪い菌ばかりだと思っていたけど、いい菌もあるんだと思った。いい菌のことはまだ分からない。」

🔵「野菜にとって鳥も動物も脅威だったけど、僕達は給食でお肉をいただいていると書けた。」

🔴「温度が高すぎたら、熱中症になる。だから、お茶も飲んで、ぼうしもかぶりたい。」

🔴「トウモロコシについているアブラムシは、牛乳をかけたらいなくなる。でも、他の虫を食べてくれる。トウモロコシを食べにカラスが来たら困るから、かかしを作った。」

⑷次の授業研究に向けて

何のために、どのようにして学ぶのかを基軸として考えることを大切にしたい。今回の授業では、ベン図を使いたかったわけではない。恩恵と脅威の影響が及ぶものが、野菜だけでなく私達人間にもつなげて、概念的理解を深めることを目的として行った。思考を可視化し、協働的に学ぶことで、概念的理解に向かうことができた。次回の授業研究に向けて、自己調整と Agency と概念的理解の関係を探究していく。